

第104回公開シンポジウム

子どもの活動が地域社会を創る ～学校と地域・家庭が協働していく点から学ぶ～

◆ プレゼンター

新 崎 国 広

大阪教育大学教育学部准教授／地域福祉論

◆ パネリスト

相 澤 亮太郎

甲南女子大学総合子ども学科准教授／人文地理学

◆ 司 会

一 色 伸 夫

甲南女子大学総合子ども学科教授／子どもメディア学

一色：第104回子ども学講演会を始めます。本日のテーマは「子どもの活動が地域社会を創る～学校と地域・家庭が協働していく点から学ぶ～」です。社会の複雑多様化に伴い家庭や地域の教育力が低下し、「貧困の世代間連鎖」や「社会的孤立」が深刻化しています。このため子どもたちも現在の生活と将来への不安を「生きづらさ」として実感しています。このような状況を打破する取り組みとして、地域福祉の観点から「学校と地域・家庭が協働し子どもがともに育ち合う環境づくり」について考えます。

今日、基調講演、プレゼンターとしてお越しいただいているのは、新崎国広先生です。大阪教育大学教育学部准教授で、地域福祉論をご専門にされています。先生のご略歴をお話します。最初に肢体不自由児施設にて、ソーシャルワーカー兼ボランティアコーディネーターとして従事されました。それから働きながら社会福祉士資格を取得、大阪教育大学大学院健康科学専攻修士課程修了ということで、その後2003年4月より現職ということです。ご著書は『新福祉教育ハンドブック』『なごさの福祉コミュニティを開く、福祉施設の新たな挑戦』『ボランティア論』などがございます。それから社会的活動とか福祉教育研修などもなさっておられます。

それから、今日のパネリストは本学総合子ども学科の相澤亮太郎先生においでいただいております。相澤先生は総合子ども学科准教授、専門は人文地理学です。活動としては、学生時代は阪神淡路大震災の被災者が暮らす、仮設住宅や災害復興公営住宅における高齢者支援活動などもされていました。研究としても災害被災地における地域社会、文化、空間の変容という研究テーマをされています。では、ここからは新崎先生にお話をいただきます。よろしくお願いいたします。

新崎：皆さん、こんにちは。今一色先生からご紹介いただきました大阪教育大学の新崎と申します。よろしくお願いいたします。今日は、学生さんは保育士、幼稚園の先生、小学校の先生、所謂、児童教育に関わることを勉強されている学生さんであったり、一般の方々にも来ていただいております。

す。テーマとしては、「子どもの活動が地域社会を創る」ということで、子どもたちの課題を少しお話ししながら、先生方や保育士さん、地域の方々が交流する、そして一緒に考えていく大切さを学んでいただければいいかと思います。

今日は3つのことを皆さんと一緒に考えていただきたいと思います。まず、一つは、子どもを取り巻く厳しい環境についてです。今、うちの学生にも「貧困という問題がどこの国で起こっていると思うか」と聞くと、アフリカとか発展途上国で起こっているとよく言われるのですが、実は日本の中、神戸、大阪でも起こっている身近な問題であるということを皆で考えていただきたいと思います。

それ以外にも今日、オレンジリボンのバッジをつけています。所謂、児童虐待、そしてこれはパープルリボンといって、ドメスティックバイオレンスを防ぐという、所謂夫婦間では、ドメスティックバイオレンス、でもそれを目の当たりでみる子どもたちにとっては、心理的虐待に繋がる、そういった子どもたちを取り巻く、厳しい環境についても皆さんと一緒に少し考えられるといいかと思います。そういった厳しい環境、そこでため息をついては解決しません。地域の教育力、地域の福祉力、地域の支援力、もっと言えばあとで言いますが、地域のお節介力、ちょっとお節介さんというのも大切かと思います。学校と地域と家庭の協働ということで、皆さんが先生や保育士になった時、たぶん、今日お集まりの皆さんは、何らかの形で、助け上手だと思います。子どもたちに対して保育をしたり、いろいろなことを教える、教え上手かもしれません。それから、助けられ上手、つまり、今とてもいろいろな複雑な問題が起こってきて、先生一人で、ソーシャルワーカー一人でがんばっても、なかなか解決できない問題があります。そんな時、助けられ上手というのを皆と一緒に考えていただければいいかなと思います。伝わっていますでしょうか。

少しだけ自己紹介を兼ねて、今は大学の先生をしています。でも大学の先生になったのは、今から16年前です。44歳の時でした。今年、還暦です。私が、子どもに関心を持つようになったのは、児童相談所でいろいろな虐待にあっている子どもたちに出会いました。ボランティアで関わった子どもたちに、そして自分の親から虐待を受けたりした子どもたちの苦しみに出会い、また彼らの力、強さに出会ってきました。就職がなかなかうまくいなくて、児童相談所に勤めたかったのですが、試験に落ちてまして肢体不自由児施設、障害がある子どもたちの施設でソーシャルワーカーとして21年間勤めました。ですから、福祉と教育の両方の視点から子どもたちの問題について一緒に考えていただければいいかと思います。

教育と福祉の両方に関わっていて共通する問題というのは、いろいろとあります。大切なこと、一つは人間の尊厳、当たり前ですが、ここにいるすべての人も大切です。目の前の子どもたち、命がとても大切ということをもう一度学び直さないといけない子どもたちもたくさんいます。

「ノーマライゼーション」という言葉を聞いたことがありますか。ノーマライゼーション、障害のある人もない人も子どもたちもおじいさん、おばあさんも全ての人が幸せに生きていく社会、そんな社会がノーマル、当然の社会で、そうでない社会は弱くもろい社会なのだ、駄目な社会なのだ、そういった社会をどうやって作っていかうかというのが、教育の課題でもあり、福祉の課題でもあると思います。社会的存在である人間、これはあとで少し皆さんにも体験してもらおうと思っています。

一番大事なところですので、下線を引いてください。皆さんが実習にいったり、ボランティアに行った

りしているとよくわかると思います。今、福祉でも教育でも大きな目的として、セルフエステームつまり、子どもたちが自分は大変な命を持っているのだ、僕は誰かに愛されているのだ、私はとても心配してくれている人がいるのだということがなかなか思いつらい社会になっている。そして自己有用感、虐待というのはいろいろな問題があります。身体を傷つけることも許せませんが、心を傷つけてしまう。「お前なんて生まれてこなかったらよかった」とか「お前がいるから貧乏になったのだ」と言われ続けてきた子どもたちは自己有用感、自分がいろいろな可能性を持っているということを心を閉ざしてしまうようになってしまいます。だから、皆さんが先生になった時、教科を教えるいろいろな生活習慣を教えるとともに、あなたはこの社会の中で家庭の中で地域のなかでとても大事な存在ですよということを伝えてあげるとそんな先生、職員になってもらえたらうれしいと思います。

相手の立場になって考える。これは言うのは簡単ですが、実は難しい。実験してみましょう。皆さん、今度実習に行った時にすぐに使えるワークです。まずは、1・2の3で同時、ジャイケン、ぱー！ 勝った人。もちろんいます。引き分けた人。もちろんいます。何が言いたい、地域の中にはいろいろな人がいます。皆さんが担当するクラスの中にもいろいろな子どもがいます。初めから「先生好き、勉強を教えて」という子どももいます。でも、本当は先生のことが好きだけと言えない子どももいます。いろいろな課題を抱えている子どももいます。ですから、観察力、アセスメントというのは教師にとって大事だと21年間の実践の中で学びました。

では、次は5回続けて勝ってください。後出しジャイケンで5連勝できたら皆さんの勝ちです。いきますよ。ジャイケン・グー！ ジャイケン・パー！ ジャイケン・チョキ！ 勝てた人—殆どの人が勝っています。

「なぜだと思いますか？」と私は小学校、中学校の生徒さんに訊くのです。そしたら、「当たり前や、後出しジャイケンが答えがわかっているから誰でも勝てるわ」という答えが返ってきます。そしたらしめたもん。

今度は一つだけルールを変えます。後出しで5回続けて負けてみてください。負けるが勝ちの後出しジャンケン。いくで！（ジャンケンの過程省略）。どやった？ 5連敗できた人！ 優秀やねえ1割2割おるから。でしんかった人？ 後出しジャンケン勝つのは簡単だけど、負けるん目茶目茶難しい。なんですか？ つまり、皆、保育士さんや学校の先生も、授業を聞いてたら必ず言うでしょ？ 「相手の立場になって考えよう」「思いやりの心を持とう」。これ言うのは簡単やけど、目茶目茶難しい。なんですか？ それは自分が物心ついていまの歳になるまで、ジャンケンに勝つための練習をずーっと無意識のうちにやっけてきているから簡単にできる。でも相手の立場に立って考えるって、相手は皆違うから自分の想いだけを伝えてたらなかなか伝われへん。「こうですああです！」と伝えたいことばかり伝えても、却って子どもたちは萎縮してしまうかもしれない。だから子どもたちの反応を見ながら、ニコニコ笑って頷いてくれる子、そっぽを向く子、いろんな子どもたちの心を見つけて、そして一緒に考える先生になってもらえたら嬉しいなと思います。

ちょっと立ち上がっていただいていいですか？ 「あなたの1分間」というゲーム。「はい」と言ったら目をつぶって、1分間経ったと思ったら座る—これだけのゲーム。用意、スタート！（過程省略）。はい、

ありがとうございます。いちばん早い人で42秒。いちばんのんびりした人でも1分23秒。これ何のゲームか。よかったら実習なんかでやってみてください。

これは1分間経って正確に座れた人が正しい、というゲームではないんです。何が言いたいのか。一つは、個別化。一人ひとりが感じる1分間の時間は皆違う？ いままでやってきて、17秒の人がいました。びっくりしました。「お忙しそうですね」と走って行ってマイク向けたら、「いやあ忙しいですわ」と目茶目茶忙しそうやった。反対にいちばんのんびりした人、何分ぐらいだと思う？ 2分が大体、静かに待ってもらってる限界。2分経つとザワザワしてきます。「おい寝てるんちゃうか?」「ルール忘れてるんちゃうか?」。いちばんのんびりした人は75歳の女性の方—3分45秒! これもちょっと驚きました。

言いたいことは何か。二つです。一つはさっきも言った個別化。皆さんが担当する子どもたちも、いろんな地域の人も、いろんな人がいます。だから福祉や教育は難しいです。だから個別化が必要です。「障害がある」とか「ない」とか「子どもやから」ではなく「新崎くん」「相澤くん」「一色くん」とか、一人ひとりの違いを見つめる目が大事だなというのが一つ。

二つ目は一皆さん、ちょっと心の中で考えてみてください。「1, 2, 3」と数えてまったく他人のことを気にせず座った人もいると思うけど、わりと多くの人が「60数えた」「コトリとも音がせえへん」「誰も座ったような音がせえへん」「あと10ぐらい読んどこか」と様子を見た人、きっといたと思います。誰とは言いませんけど今日も数名、1回ぱっと目を開けてキョロキョロしてまたつぶってしばらく経って座った人、40ぐらいしか数えてないのに皆がカタカタカタと音がした途端に「41424344!」と速くなって「いいや座っとけ!」となった人。これは何が言いたいのかというと、人は他人のことが気になる、ということ。もうちょっとかっこよく言うと、人間は一人で生きてるんじゃなくて、社会との関係の中で生きてるんだということ。

だからそういう意味で、社会的孤立や孤独が非常に大きな問題なんだとご理解いただけたらと思います。伝わっているかな。社会的孤立というのが、福祉の大きな課題だと思ってくれたらいいかなと思います。そういう意味で福祉と教育が身近になったらいいなと。

地域福祉とはさまざまな人々が、子どもたちも高齢者も障害者の人たちもお互いの違いを認め合いながら、一緒に生きていく社会。そしてもう一つ、ソーシャルインクルージョンという言葉、たぶん習ったかと思いますが、決して独りぼっちにしない心。僕は「福祉の心とは何か、一言で言ってください」と訊かれた時、「独りぼっちを作らない心」と伝えるようにしてます。社会的孤立、子どもたちが「私は誰にも愛されていない」「誰にも大切にされていない」と思った時、人はどんどんどん元気がなくなってくると思います。

いまのゲームをやった後『私と小鳥と鈴と』という詩を読んで、子どもたちと一緒に授業をやったりします。〈私が両手をひろげてもお空はちっとも飛べないが、飛べる小鳥は私のように、地面を速くは走れない。私がからだをゆすっても、きれいな音は出ないけど、あの鳴る鈴は私のように、たくさんの歌は知らないよ。鈴と、小鳥と、それから私、みんなちがって、みんないい。〉の「みんなちがって、みんないい」は、どうでもいいじゃなくて、一人ひとりの個性を認めていこうというメッセージからだと思います。

ちょっとつらい話、大急ぎで話したいと思います。今年は神戸、阪神淡路大震災から20年、それ

から 2011 年の東日本大震災。そんな時、人と人の絆ということがよく言われます。でも、絆が大切なのは実は震災の時だけではなく、日常ではないかというお話です。

さあ、これもつらい話です。2025 年、27283 人が一年後、25427 人に減りました。これは何の数字かご存知ですか。大切な大切な命を自ら絶ってしまう人たちが、1 年間で 25000 人もいるということ。そして、15 歳から 29 歳までの死亡原因の 1 位が自死だという事実。つまり高齢やから、障害があるから元気がない、社会的孤立をしているのでは決してないということ。もうシビアすぎるのであまり言いませんけども、そういう意味で命の問題はすごく身近にあるのかなと思います。

児童虐待、それはもちろん虐待する親の問題です。でもその親だけに問題を押しつけてしまうのではなくて、保護者の方の子育て負担や子育て不安というのも大きな問題かなと思います。皆さんが幼稚園や小学校の先生になった時、いじめ、不登校という問題も現実にくっついてくるかなと思います。そういう問題は社会的孤立や孤独が大きいんじゃないかなと思います。

コミュニティ意識の低下、これは後ろにいらっしゃる鈴木先生が専門です。地域の中でのコミュニケーションがすごく弱くなってきている。

「おはようさん、元気、今日がんばって学校に行きなさいね。」というそういったコミュニティ意識、それを一生懸命取り戻そうと今、小学校の中では登下校に地域の方々が子ども見守り隊を行っています。あれは単に横断歩道に立って安全を確認するだけの仕事ではありません。そういったことで子どもたちが「地域のおじさん、おばさんが僕らの命を守ってくれているんだ。僕らのことを大切にしてくれているのだ」と感じた時に、子どもたちはクラスの中で仲間外れにされたり、「お前なんか用なしだ」と言われても子どもたちが「ぼくのことを大切にしてくれる先生、ぼくのことを認めてくれる先生、地域の人がいる」という実感になるのだと思います。

今、家庭の養育機能の低下、あとでお話します。ひとり親家庭が増えてきている中で、子育てがものすごく難しい。

そして、最後、皆さんがプロになった時に実感すること。これは福祉や教育に対する無関心化。これはどういうことか。「教育は先生に任せておけばいい」「先生何とかして」と、家庭でやらなければならない教育や地域で支えなければならない福祉や教育を全部、先生にお願いというのが今、先生方が「つらい」と言われているところです。子どもの貧困率、先ほど言いました、日本の中で貧困という問題が非常に大きな問題になっています。多分、ここにいらっしゃる学生の皆さんにとっては、貧困はあまり感じていないかもしれませんが、今、6 人に一人が貧困の状態だと言われています。想像してみてください。40 人のクラスがいたら、2 人から 3 人は経済的な貧困、逆に子どもが親御さんから精神的虐待を受けていて、社会的貧困、人間関係の貧困というのが、非常に今厳しい状況にある。ひとり親世帯の貧困率の日本のところを見てください。58.7%、つまり、ひとり親家庭でお母さんが一生懸命働いていても、且つ貧困であるということが、日本の場合はとても高いという状況です。そういったことをグラフにしました。今 6 人に一人の子どもたちがそういう相対的貧困です。

ここは、さらっといきます。絶対的貧困とは何かというと、生活保護を受ける、明日食べるものがないというような貧困に比べると、経済的貧困と関係性の貧困というのを見てください。ただお金がない

ということだけではなく、社会活動に参加できない。つまり自分が子どもたちだったら、子どもと一緒に買い食いをしたり、クラブ活動をしたいけど、アルバイトがあつていけないとか、経済的に厳しくて子どもたちと一緒に付き合うのが難しくなったりというそういう人間関係や社会関係から排除されというのは、厳しい言葉かもしれませんが、孤立してしまうという問題、このような問題は非常に大きな問題だと思います。

相対的貧困というのは何かというと、日本の国の一番お金持ちの人と一番経済的に厳しい人を並べて、半分の半分、四分の一以下で生活している人が、6人に一人、16%いるというのが日本の状況です。何度も言いますが、「私は先生になるけれども、私のところは困っていないから関係がない」と思わないでください。皆さんが担任をした子どもたちにそういう状況の子どもたちがいる、ということを理解していただくことで全然違うと思います。「なぜ勉強できないのか」「どうして遅れてくるの?」と怒るだけでなく、なぜこの子どもはいつも眠たそうな顔をしているのか。どうして遅れてくるのだろうかということも少し頭の隅に置いて関わるだけで、先生と子どもたちの関係は随分変わってくると思います。

今、子どもの貧困のキーワードは、潜在性、連鎖性、無責任性と言われます。

潜在性というのは見えにくいのです。お母さん、お父さん、「子どもが周りの子どもと違うことをしたら不憫だから」と思って、必要な食費を削ってでもすばらしい靴を買ったり、筆箱を買ってあげたいというのが親の気持ちです。だからなかなか貧困が見えてきません。連鎖性というのは、子どもたちにとつたら、親を選べません。経済的に厳しい状況で生まれてきた子どもたちが、結果として経済的に厳しい状況になってしまうというのは、とても残念なことだと思います。そんな社会を何とか変えたいというのが、私たち福祉や教育の大きなポイントではないかと思います。そして、無責任性。子どもは親を選べません。だから子どもたちが貧困であるということは結果であつて、それを責めることはできません。この辺り、興味のある方は後で読んでおいてください。

連鎖性というところで、生活保護を受けている3割以上の方が、生活保護を経験している。誤解しないでください。貧乏が駄目だということではありません。そういった状況になるとき、2つ目のところを見てください。今、大きいのは非正規雇用一所謂、労働時間に比例してお給料を稼ぐというそういうシステムが日本の中で4割を越えたというのが、今の状況です。ひとり親家庭のお父さん、お母さんを想像してください。「自分の子どものため経済的にしっかり儲けられないのか」と思ったら、働かないといけません。働く時間が長ければ長いほど、育児にかかる時間が少なくなります。焦ってきます。そういった中で子どもたちが素直な子どもだったらいいですが、少しやんちゃな子どもだったり、発達に課題を持っている子どもたちだったら、育てにくい子ども。「私はこんなにがんばっているのに」という想いが、結果としてあつてはいけないことだけれども、DVとか児童虐待という形に繋がっていく可能性が高いと思っておいてください。この辺りは、何度もいいますが、ひとり親家庭が置かれている環境が今非常に厳しいということをご理解いただけたらと思います。

ダブルワーク。トリプルワーク。皆さんもアルバイトであるかもしれません。朝ちょっとバイトして、夕方もうバイトする。それはもしかしたら、自分が買いたいものを買うためかもしれないけど、子育てのために限られた時間を必死で動いてる中でついつい、子育てが厳しくなってる。そんなときに、『子どもの

『貧困対策法』という法律ができました。また読んでいただければ、と思います。子どもの将来が生まれ育った環境に左右されることのないように、というのが大きなテーマです。子どもたちに対する教育的支援、それは皆さんの力です。生活の支援、就労の支援、そして経済的支援—これはソーシャルワーク、行政のところかもしれません。子どもたちの将来が、その生まれ育った環境に左右されない社会を実現するというのが、すごく大きいと思っています。

資料には7万人と書いています。いまから4年前の数字です。今年、児童虐待の数がいくつになるかご存知ですか。8万9千人とされています。そして来年度は—昨日児童相談所の方とお話したんですけど、「10万人を超えるのではないか」と言われていました。それぐらい子どもたちが生きづらさを抱えている問題。そして、貧困の連鎖が非常に多くの問題になっているんだとご理解いただけたらと思います。

子どもの学力に関する調査として、子どもたちの生きづらさを感じていただきたいために、DVDを観てもらおうと思います。この中では、学生たちが子どもたちの自己有用感を育む取り組みを描いてもらっています。

(DVD上映中)

長いDVDを観ていただきました。いま皆さんの中でどのように思われてるでしょうか。

これからの福祉、これからの教育というのは専門職だけで育てるのではなくて、皆さんの力、そして皆さんが先生になった時に、皆も学校支援のボランティアや地域で子どもたちに関わるという福祉＝〈ふだんのくらしのしあわせ〉。一人ひとりの幸せを考えるということなのかなと。いま、なぜ学校の先生が厳しい状況にあるのかということを、少しお話ししたいと思います。

いま先生に求められていることは、大きく分けて二つあります。一つは、発達としての教育。皆さんが授業の中で、国語・算数・理科・社会といった教科教育—これも教師や幼稚園の先生の仕事だと思っています。生き抜くための知識やスキルもすごく大事だけれども、今日観ていただいて共感していただいた学生さんも結構いると思うんですけど、一つは人間が存在すること自体に価値がある。厳しい家庭環境の中で「俺なんかもうええねん」とか、もっと言えばこのケースで言うと、お母さんが病気で自分が面倒を見るために不登校の状況になっている。学校に行けないのはよくないことだけれども、それはその子どもの問題ではなくて環境の問題なんだ。だからその子に寄り添う先生以外のいろんな人たち、人材が必要ではないかというとき。

これからの福祉や教育には、三つの関係作りが必要と言われています。一つはタテの関係です。都会であればあるほど子どもたちは、親と子、躰けをする／躰けを受ける、先生と生徒、勉強を教える／教えてもらう、塾の先生、ピアノの先生、いろんな先生と生徒という大人との関係は受身になりやすい子どもたち。

それからヨコの関係。クラスの友だち、これはたぶん皆さんもすごく実感できます、仲いいときは目茶目茶仲よし。だけどちょっとモメちゃうと、「あいつハミ子」。いまイジメの問題、あまり言いたくないけど、何が大きい。もちろん暴力は絶対許されない。でも一人を全員で無視したり排除するという、見えづらい虐待やイジメも非常に大きな問題です。それともう一つは、対象は誰でもいいという可逆性。

これはもう非常に厳しいイジメの状況です。つまりほっといたら、イジメをかばった人がイジメを受けてしまうという現状も厳しいです。だから無関心を装う。「僕は知らないよ」と言いながら加害者になってしまうという状況です。最後にナナメの関係です。今観ていただいた DVD も、ナナメの関係の大切さを描いたものです。学生や地域の方々が「そんなことないで」「あんたは生きてるだけですごく大事なんやで」と言ってくれる大人のひとたちを、これからどう作っていくか。これは福祉のすごく大きなテーマかなと思います。

貧困の連鎖を断ち切るために、皆さんができること。それは、「愛の反対は憎しみではなく無関心」。マザー・テレサの言葉です。私たちが、いまの子どもたちが置かれている現状を知り、そして貧困という問題を遠い遠い国の物語ではなくて自分たちの問題—そこまで思うのは無理かもしれないけど、皆さんがお仕事として関わる子どもたちの問題としてリアルに考え、そして行動化していくことをお願いできれば、とても嬉しいなと思います。

そこで、お節介のすすめ。ウチの学生に「お節介ってどう思う?」と訊いたら、ほぼ9割から10割が「悪いこと」と答えました。その理由を訊くと、「先生、お節介って他人のプライバシーにずけずけ踏み込んでくることと違うん?」と言うんです。たしかに勝手に入ってくるのは駄目です。でもいま大切なことは、いい意味でのお節介。目配り・気配り・心配りができて、他人の困りごとを放っておけないひと。僕はこれは専門職にも必要だと思うんです。つまり先生も、「私は教師だから、ものを教えるだけ」「私は保育だから、保育をしておくだけ」ではなく、お節介力があれば子どもたちがちょっと不安そうに映ったときにすぐ助けられるんです。

自分でなんとかしようと思っても難しい、そんなときにいろんな専門職がいます。児童相談所のソーシャルワーカー、スクール・ソーシャルワーカー、地域には社会福祉協議会で一緒に考えてくれるひとがいます。そういう専門職の方の情報を、いまの間にできるだけ集めておいてください。皆さんが先生になったときにきつと、課題を抱えている子どもたちがいます。先ほど言った6人に一人。そんなときに、これからはいわゆる教育コミュニティづくり。先生になられる方にぜひ憶えておいていただきたいのは、家庭と地域と学校が子どもたちの問題について一緒に考えていく。ですから今日来ていただいている一般の方たちもぜひ、自分たちが子どもたちに何ができるかということと一緒に考えていけたらいいなと思います。

これは〈吹田のこれからを考えるカフェ〉ということで、ここにいらっしゃる緑のジャンパーの方や優しそうな眼差しで見ている〈子ども見守り隊〉、いわゆる小学校の登下校の応援をしてくれている地域の方々と子どもたちが一緒に、吹田市で実践したんですけど、小学校の先生方に協力してもらってグループワークをして、「これからの自分たちの町をどんな未来にしたい?」と皆で話し合ってもらった取り組みです。

中学でもやりました。中学生はちょっと恥ずかしそうだけど、でも地域の方が「お、よく頑張ってるやん」「こんなに中学生が頑張ってくれてるのなら、わしらおじいちゃんはいつ死んでもええな」と笑いながら、子どもたちのことをいっぱい褒めてあげている。つまり、教師や親は嫉けや教育で厳しく指導しなければならないときがあります。そんなとき、ちょっとナナメの関係—さっきの DVD の

学生が、子どもたちのしんどさに寄り添う。また、地域の方々が寄り添う。そういう支援ができたとき、先ほど言った自己有用感、「あ、この町に生まれてよかった」と思うような子どもたちになってくれるのではないかなと思います。

あとの資料は細かいですけど、いま子どもの貧困対策ということではいわゆる「子どもの居場所作り」「子どもの学習支援」というのが書いてあります。

今日いちばんお伝えしたいのは一いま子どもたちが置かれている状況の中で、そういった孤立や孤独をなくしていく取り組みは、教師やソーシャルワーカーといった専門職だけではなく、地域の方々と皆さんのような学生さんたちができること、温かい眼差し、こういった眼差しもすごく大きな力になるということだけでもご理解いただけて、新崎のお話を終わりたいと思います。

熱心に聴講いただいて、ありがとうございました。

一色：新崎先生、どうもありがとうございました。いろんなことをしっかりと皆さんたちに伝えてくれた気がします。

福祉と教育というところが一つの大きなポイントになってましたよね。ノーマライゼーションとか、全てのひとが幸せに生きている社会、そういう社会といまの日本は真反対ではないかということから具体的に、じゃあ子どもたちがどうなってるのか。そしてそんな子どもたちを助けるには一体、何がどうできるのかというところで、具体的なお話をいただきました。どうもありがとうございました。

それでは、パネリストとして相澤先生にここからはお願いできますでしょうか。

相澤：皆さんこんにちは。僕はこうした大人数の授業で喋る授業はなくてですね、こじんまりと小学校の授業かゼミで喋るぐらい。たぶん皆さん、僕のこと知らないと思うんです。なので僕が学生の頃に「こんなことしてたよ」ということを紹介したら、なんとなく伝わるかなと思ってます。

(写真を見ながら)

真ん中、僕の友だちのケンちゃん。僕はこの写真を撮っている方なので、ここには写っていません。プレハブの建物の中で、何かしています。何をしているのか分かります？ おじいさんおばあさんたちと、お茶やコーヒーを飲んだりお菓子を食べたりしています。これは神戸市の灘区にある、JR六甲道の駅からすぐ近くの成徳小学校の隣りにあった大和公園仮設という仮設住宅にあった、ふれあいセンターという集会所です。この仮設住宅がある場所は、街中の野球場がある公園でした。規模はおおよそ300世帯ぐらいで、住んでいる人はほぼ高齢者、障害者でした。私は神戸大学出身なのですが、震災が起きてから3年目、97年に神戸大学に行きました。震災直後、僕の少し上の先輩たちが「仮設住宅があって喫茶の活動をしてくれる学生さんはいないですか」と頼まれて、そこで、私たちの先輩が引き受けて、仮設住宅でお年寄りと一緒にお茶会の活動が始まったそうです。私の少し先輩で、今、尼崎市長をしている稲村和美さんが、この活動を始めた人の1人です。

私もお茶会の活動を引き継ぎましたが、仮設住宅は5年ぐらいでなくなり、その後、仮設の住民は復興住宅に移っていきました。これはJRの灘駅のすぐ南にある岩屋北町というところの復興公営住宅

なのですが、今も後輩たちがそこで一緒に住民の皆さんとお茶会をして、夏にイベントをしたりしています。もう少し南にはHAT神戸という団地があり、こちらでも後輩たちが住民の人たちと一緒にお茶会しています。なぜ、この活動が必要なのか。私たちは、ここに行ってお茶を飲んで、お年寄りの愚痴を聞いたり、「結婚相手にはこういう人を選ばないといけない」と毎回言われたり、毎回下ネタトークで盛り上がった、というのを毎週やっていました。復興住宅もしくは仮設住宅で孤独死の問題がある、と話を聞いたことがあると思います。

そもそも仮設住宅にはどんな人が住んでいたかわかりますか。1995年1月17日、地震が起きました。地震の揺れはイメージしにくいかもしれませんが、大きく左右に70センチから80センチぐらい地面が揺れたのです。木造で古くて、耐震強度もあまりないような家が真っ先にたくさん壊れました。もちろん、そういった家以外でも、大きな被害は出ているのですが、そういったところに住んでいた方の多くはお金を持っていません。家賃2万円、3万円とかという文化住宅に住んでおられた方がたくさんおられました。お金があまりない。それから高齢の方がたくさんおられて、さらに奥さん、ご主人を亡くして単身で暮らしているという方もたくさんいます。そういった震災で家をなくして、仮設住宅に移って、さらに復興住宅に移ってという方がたくさんおられるわけです。

孤独死と言いましたが、孤独に人が亡くなる。どういうことかということ、死んだ後誰も見つけてくれない。亡くなって1週間、1ヶ月、長いと1年、2年経って見つかるということがあるのです。「亡くなくても孤独だな」という話になるのですが、注目すべきはどう亡くなったではなくて、その人がどう生きていたかです。1年経っても見つけてもらえないような生き方を、亡くなるまでずっとしていたわけです。そういう孤独の問題というのがずっとあるので、とにかく行って、「お茶会に学生が来て楽しく話をする場があるよ」ということで来てもらう。でも出て来ない人もいます。そういう人のところには、「お菓子をどうぞ」と言いながら顔を見に行くと、場合によっては家にあげてもらいます。人と喋りたくないという住民の方もいるのですが、学生が行くと「話をしていけよ」と言って、1時間とか、2時間とか話をしてくれます。戸別訪問するのですが、行ったまま帰ってこない学生がいる。そういう場合は「救援」に行くのですが、今度は私たちが捕まて、さらに30分1時間、話に付き合うということをしていました。そのような活動を仮設住宅や復興住宅でしていました。

これは、アコーディオンを持ってタヌキの着ぐるみを来て、子どもたちと一緒にパレードする活動です。これは、今より20キロぐらい体重が軽い頃の写真ですが、子どもと一緒に仮設住宅で餅つきをしている写真です。あとはだんじりを引っ張りに行った時の写真とか、これは、あちこちで災害が起これば、災害救援のボランティアとして出かけ、家に入り込んだ土砂を取り除くために長靴を履いて活動しています。そのようなことをいろいろと学生時代にしてきました。いろいろな形でボランティアの現場に行くのです。

そういうような経験をする、皆さん方も色々な経験をしていると思いますが、もちろん、「ボランティアはいいよ、大事だよ、絶対必要だよ」という声がある一方で、怖さとか、あるいは嬉しくないこと—例えば、復興住宅に行って「お茶会をします」という活動をした時に、しばらくしたらある時、自治会の町内会長がずらっと並んで、私たちは「出て行け」と言われたのです。それはどういうことかという

と、「ボランティアが復興住宅の住民を甘やかすと最終的にしんどくなるのは、町内会の会長だ。自分たちのところに住民がいろいろな要望を言うてくるのは、ボランティアが甘やかすからだ」と言われたことがあります。それでも私たちは、必要だと思ってやっているわけですから、「そう言われても……」と四の五の言って、結局出て行きませんでした。自分たちはいいと思ってやっけていても、それが駄目だと思っている人は当然いるわけです。

それから、戸別訪問で会った、仮設住宅から復興住宅に移ったおばあさんがいました。明治生まれで当時 93 歳、非常にしっかりした方で、「絶対に子どもの世話にもならないし、福祉の世話にもならない、生活保護ももらわない」と頑張って暮らしておられました。ある時、電気が点いてテレビもついているけど、呼び鈴を押しても出てこない。間違いなく、部屋にいます。中で倒れているのではないかと、いう状況です。「どうしよう」ということになって、最終的に近所の交番に相談に行きました。交番では、1 人暮らしのお年寄りの家族の連絡先を控えているという仕組みがあるとのことで、それから 2 時間後に甥御さんが来られました。後から警察の方に伺ったところ、確かに倒れていたようですが、その後何とか調子を取り戻して元気になられたそうです。ところが、その次の週に改めてそのおばあさんのところに訪問に行くと、「倒れていたぐらいで大騒動して、もう二度と来るな」と言われて、本当にもう二度と会ってくれませんでした。

色々な形でボランティアの現場に行くというのは、大事なことなのですが、一方で、行った時に誰かの足を踏んでいないかとか、誰かを傷つけていないかとか、自己満足で終わっていないかということを考えながら、ずっと通っていました。これは、震災とか高齢者の活動に限らず、子どもに関わる活動も同じです。先ほどの映像にもありましたが、とてもいい、プラスになる部分もある。でも一方で誰かを傷つけるかもしれない。先ほどのお節介というものに対する感覚の違い、「誰か嫌な思いをしているのではないか」、ずっと自問自答です。そういうことを考える場を与えてくれたのは間違いありません。

プロであれば、自分の仕事として責任を持ってやる。でも、ボランティアで行く人は、たくさんいると思います。その時、何かのきっかけで子どもを傷つけるかもしれない。親御さんからクレームがくるかもしれない。そういったリスクや心配事とずっと向き合いながら、その心配とか葛藤があるからこそ自分自身を鍛えたり、自分を成長させたりする部分があるかとずっと考えながら、活動をしてきました。私たちは「業界就職」と言っていたのですが、ボランティアで現場に行っていて、そのままその現場に就職していく人が結構います。例えば障害者の介護のボランティアをしていてそのまま障害者の介護の仕事に就く。高齢者に関わるボランティアをしていて、そのまま老人ホームのヘルパーになるという後輩が何人もいました。そういうようなことを「業界就職」と言っていました。今はプロとして働いていますが、学生時代に現場に行っているときは、素人でありボランティアなわけです。今日、新崎先生のお話を聞いて、1 つ論点があるとすればその辺りの、素人としてほんと現場に入っていくという部分、それからプロとしてやっていく人たち、専門職としてやっていく人たちの境目とかその間にある違い、若しくは共通するものとか、その辺りのことについてお話が深められたいかなと思ひながら、お話を伺っておりました。

私からのコメントは以上です。

一色：ありがとうございます。では、ここからは、相澤先生が最後にお話されましたように、そういう部分と新崎先生の部分とをどのようにドッキングしたらいいのか、まず新崎先生からお願いできますでしょうか。

新崎：相澤先生の写真を見せていただきました。人間というのは変わるなということを思いながら見せていただきました。今のお話の中で1つ論点になるのは、ボランティアの功罪というところだと思います。確かに、「私はボランティアをしてあげているのだ」という形で関わる、そういう方は今日は論外です。今、相澤先生がお話をされた時に、自分が本当に活動していることが大切なのだろうかということを所謂悩んだり、ジレンマというのですが、揺らぐ心。私の大好きな本の中に、尾崎新という人が書いた『「ゆらぐ」ことのできる力ーゆらぎと社会福祉実践』という本があります。先ほど、相澤先生は、「プロと素人は違う、プロは責任がある」と。責任があるだけ揺らぎます。「本当に自分の支援が正しいのだろうか」これはボランティアであっても、プロであっても私は変わらないと思います。逆に言うと揺らがない人が怖い。自分の援助観、教育観でぐいぐいと子どもたちや地域の方々に関わっていくことほど、先ほどボランティアの方がしてはいけない。土足でそのご自身の問題に踏み込んでいくというのと共通するのかなと思います。

もう1つは、今、相澤先生はしっかりされていたからだし、そういう活動に参加されていなくても今先生になっておられたかもしれないですが、私はそういう福祉教育、ボランティア学習という立場でいうと、活動をすることによって、たくさんのことを学ぶことができる。逆にいうと、リスクや心配があります。「こんな活動をするべきでなかった、こんなつらい思いをして」。私の担当している学生でも、児童養護施設にずっと関わっているボランティアがいます。その時、よく私の部屋に来て、「私たちは子どもたちのために勉強を教えているのに、『帰れ、嫌いだ』と言われます。私たちは一生懸命応援したいのに、なぜそんなことを言われるのか、揺らぎます」と言います。「ボランティアなのだから、辞めたら?」とあえて言いますと、「そんなわけにはいきません」と怒ります。「だって子どもたちのことを考えると放っておけません」と言います。「では一緒に考えよう、なぜ子どもたちは『嫌い』と言うのか、なぜ、目の前で『帰れ』と言うのか」。

先ほどの話、地域の方々が相澤先生たちに「甘やかすな」となぜ言ったのか。本当に嫌だったら子どもたちは目の前まで来て「嫌い」と言いません。ドアを閉めて出てこなかったら済む話です。目の前で「帰れ」と言うのは、それは厳しい状況の中でお父さん、お母さんに拒否されたり切られたりしたあの辛さが、来てくれたお姉ちゃんを受け入れてしまうと、また裏切られてしまったときに蘇って怖いから、と試し行動を何度もしてくる。それでも踏みとどまる学生がいてくれたとき、子どもたちは「お母さんでもお父さんでもない人が、こんなに私たちのことを真剣に考えてくれる」という人と出会います。その時初めて、先ほど言いました自己有用感、自分のことを必要とされているということが芽生えるのかと思います。そういう意味では、功罪は確かにあると思います。でも、リスクを恐れていて何もできないよりはーポジティブリスク論という考え方があります。目の前のリスクを怖がって何もしないより、そのことをしないことによって将来起こってくる大きなリスクを考えたら、ある程度のリスクを超えるチャレンジも大

事ではないかということを感じました。

一色：ありがとうございました。相澤先生、今のお話で何かございますでしょうか。

相澤：付け加えになります。今、NHKの朝のドラマを観ている人いますか。観ている人と観ていない人で差があるかとは思いますが、ちょうど、今日もその言葉が出てきたのですがファーストペンギンという言葉が出てきます。ペンギンは、氷山で群れになって海に飛び込んでいきます。ペンギンはよちよちと歩きますが、最初に勢いよく飛び込む1匹目がいます。それから後から続いて、海に飛び込んでいきます。餌を獲りに行くのです。海に行ったら鯨がいるかもしれないし、他の動物に食べられたりすることがあるかもしれない、でも1匹目がほんとに勇気を出して飛び込んでいくことによって、他の皆が続いていく。その1匹目のペンギンのことを、ファーストペンギンといいます。NHKのドラマでは、「1番初めに飛び込んで行くことができるあなたはすごい」ということで使われていた言葉です。

ボランティアの世界でも、そういったファーストペンギンみたいな人がいます。本当にフロンティアで、なにも見返りというか、自分のことを一切考えない。災害ボランティアの世界ではよく「世界平和と家庭不和」というような言い方をして、世界平和のことを一生懸命やっている人に限って、家庭が不和という笑い話のような深刻な話を聞いたりするのですが、そういうような人たちが、ある部分で世の中を変えていってくれるようなそういった期待感を持って、ボランティアが語られている。制度も仕組みも給料も何もない状態で、でも必要だからやるのだということで、飛び込んでいく人がある。ただ、一方で、その後でいろいろな形で本当に地道に、ペンギンでいうと「最後の最後に飛び込むのをやめておこうか」というところで一生懸命踏みとどまって活動をするという部分もあるかと思います。そういう意味では、ポジティブリスクのお話がありましたが、そのボランティアの活動の仕方とか現場への関わり方も随分と多様なところがあって、自分ではどこができるのか、どういったところが得意なのかというようなことを、いろいろ試行錯誤できるような機会があればいいなと思っています。

新崎：ボランティアの語源というのを聞いたことがありますか。

ボルケーノ (VOLCANO)、火山なのです。つまりエネルギー、つまりボランティアというのはいいことばかりではないのです。つまり、先ほど相澤先生がおっしゃったように、相手をもしかするともしかすると土足で踏み込んで、傷つけてしまうかもしれない。だからそこは注意しないといけないというのはあるのですが、逆に、それを怖がって、人と人が出会わなくなったとき、やはりもっと大きな深刻な問題が起こってくるのではないかと私が思っているところです。逆にいうと、相互作用だと思っています。つまり相澤先生が、震災に関わった時、地域の方も喜ばれたと思う。だけれども、多分その中で学ぼうとは思わないけれども、地域の難しさとか関わることの大切さということを自然に学んでくる。これをインフォーマルエデュケーションと言います。経験としての学び、皆さんもそうではないかと思います。友だち関係の中で、言い過ぎたと思ったら、次から気をつける。喧嘩をして学ぼうと思ってやったので

はないけれども、結果として大好きな親友と喧嘩してしまった後で、「あの一言は友だち同士でも言わない方がいいな」と思う学びを結果としての学び、インフォーマルエデュケーション、学校で学ぶのをフォーマルエデュケーションといいます。

皆さんが実習や学習支援ボランティアで学校からお願いされたりするボランティア、これはノンフォーマルエデュケーション。学校とは違うところで、実習で学びを期待されている。けれども、もう一歩大事なものは、日頃の人間関係や関わりの中で学んでいくこと。それは、例えば、ボランティアをする側、今回の場合は、子どもの活動に関わることによって、課題が見えてきたり、自分の生きる方向性が見えてきたり、先ほど、相澤先生がお話されたように、業界就職、それも悪いことだとは思っていませんし、逆に言うと、それが見えてきたから、例えば、4年間児童養護施設に行っていた学生は、私は児童養護施設は無理です、けれども、それを応援するために、今がんばって、行政に行って、そういう基盤整理に関わりますという業界就職があってもいいのかと思います。だから、折角、今いろいろなことができるチャンスの時に、学校の中で勉強することも大事だけれども、そういったことにチャレンジしていく中で、第二の相澤先生や、鈴木先生のように、先生も話をしたら、熱い方です。私も16年ぐらい前から一緒に地域で関わらせてもらっています。いろいろな話を聞いたら、皆さん学びことがたくさんあるかと思っています。

一色：新崎先生のDVDでのところで、途中で短くしていただきましたが、あのDVDでどのように皆さんに伝えたかったのでしょうか。

新崎：『仁の物語』と弟君の『智の物語』というのがあります。それは、京都の〈山科醍醐子どもひろば〉というところで、子どもの学習、居場所づくりをやっているNPOの実践の、紙芝居のようにしたものです。インターネットで動画検索してもらったら無料で見ることができます。

伝えたかったことは何か。所謂、最初、貧困という中で、お母さんに精神的な疾患がある、「もう俺の家なんか、勉強しても一緒だ。早く働いて、自分が稼げるようになりたい」と思っていた子どもに対して、〈おたま〉ちゃんや〈うえっち〉といった大学生が関わることによって、ロールモデル、「こんなお兄ちゃん、お姉ちゃんになりたい」ということを体験することによって、子どもたちは次の学力、勉強しようというモチベーションになったりします。

私が関わっているところで「将来の夢は何か」と訊くと、ある子どもが「コンビニの店員」と言っただけです。「なぜ」と訊くと、お父さんとお母さんが病弱で、その両親の生活を支えるためにその子どもさんが学校から帰ってきてから、買い物に行く。しかもお金がないから、近くのコンビニで簡単に買えるものを買う。すると店員さんは、子どもにでも「ありがとうございました」と言う。大人や先生、親に「ありがとう」と言われた経験が、その子どもにはなかった。だから毎回、買い物に行った時に「ありがとう」と言ってくれる、そういう大人になりたいと思って、コンビニの店員になると話してくれました。

そういうロールモデル、つまり自分がなりたいと思えるような大人がいないという現実です。ですから、

皆さんが先生や保育士、幼稚園の先生になった時に、「あんな先生になりたい」「あんな大人になりたい」と思えるようになってくれたら、子どもたちも勉強が苦手でも、そういう大人たちを見る。そういう若者を見るということで、社会的貧困というのを少なくして欲しい。そういう実践が、そこだけではなく、子どもの貧困対策法という法律、生活困窮者自立支援法という中で、地域で居場所づくりや学習支援、子ども食堂、色々なところで展開されている。そこで、大人たちを信じられる子どもたち、もっと言うと、人は必要とされることを必要とする。誰かに必要とされたと思った大人や高齢者や子どもたちは、生きる力というのを次に一歩踏み出すのではないかと思うのです。そういうのを観ていただきたくて、少し長かったのですが、見ていただきました。

皆さんの中で共感してくれた人がたくさんいたようで、とても嬉しかったです。

一色：ありがとうございます。では、何か質問、コメントなどございますか。

学生A：貴重なお話をありがとうございました。小学校では、課外授業というのが多いですが、保育所、幼稚園では課外授業がありません。例えば、課外授業の一環として、不登校の子どもと保育園の子どもが関わる場を保育士が用意をする。これは、とても難しいことだと思います。それは、不登校の子どもにもそういう難しさがあるでしょうし、保護者に対し、何故そのような環境を作っているのか保育士がすべて分かって、きちんと説明をしなければならない。そこに難しさがあるのではないかと、そういう試みは実際ございますか。

新崎：具体的な実践というよりは、先ほど一番最初に言った「助けられ上手」というキーワードを思い出して欲しいのですが、保育士さんは、子どもに向き合う専門職です。ですから、地域には、地域の中でそういう引きこもりや不登校の子どもに関わっているNPOや社会福祉協議会があるのです。だから、保育士が、そういう専門職の人と一緒にやっていきませんかというのも1つだと思います。だから、よかったら、地域でどんなことをしてくれる人がいるかというのを捜してみたり、その辺りが得意なのが鈴木先生なので、鈴木先生にも訊いてください。

一色：では、時間となりましたので、この第二部で引き続きお話を深めていきたいと思います。

〈第二部〉

一色：第二部を始めます。ここからは地域の方々を中心にディスカッションをしたいと思います。では、ご質問、コメントなどございますか。

一般A：地域福祉は、私も好きな分野なので、退職後、地域の里親里子支援ボランティアをさせていただいております。里親シンポジウムとか里親サロンに参加をして、里子の子どもたちとキャ

ンプをしたりして触れ合ったりして、里親さんに、いろいろな子育てのノウハウを教えてもらったりしながら、自分自身の勉強にもなりますし、子どものことが好きですので、そのような活動をしています。

その中で、里親さんから出てくる部分で、元々私も感じている部分ではあったのですが、小学校2年生の勉強で生い立ち授業というのがあります。生い立ち授業に関しましては、「生まれた時の写真を持てきなさい」とか、生まれた時の様子や「へその緒を持てきなさい」などと先生方が一般的に言った場合、「うちは里子だから、そんな子どもの生い立ちもわからない、出生もわからない」という中で、里親さんがとても心配をして悩んだりされるのです。その部分に関しては、いろいろな人権の問題で、最近学校の先生方も理解しておられて配慮される部分もあるかと思うのですが、もう1つこの1,2年であるのが、1/2成人式。これが派手になってきていまして、例えば参観日に親がいる前で、「自分がこのように育ててもらったのは、お父さんお母さんのおかげだ」と言わせる。ところがそういう部分についても、里親さんがとても懸念をされていて、「里子が私に対してありがとうと言ってくれるのか?」とか、そういうことで、子どもの自尊心とか先生が仰っている自己有用感の部分が子ども自身にも傷ついている部分があるという里親さんの意見もあります。

県の里親会でも行くと、学校の先生方の教職課程の中に、『里親論』とか『里子論』などが全然ないようで、先生方のお話を聞くと、「理解するけれども、もともとの教職課程の中で理解するためのものを組み込んで欲しい」ということでした。なので全国里親会の方から文部科学省に要望を出しているようです。

現実の問題として私が感じたのは、2年生の生い立ち授業と3年生の1/2成人式です。里親さんに関しまして、国の方も「里親を増やしたい」ということで、施設で育てるよりも里親さんに育ててもらったほうが社会性も出来ていいと分かっているのですが、一般的には言われていないし、虐待までの話で、保護されたとか乳児院に預けられたという話はマスコミもいっていますが、その子どもたちがその後、どこに行っているのかということで、16%ぐらいが里親さんになっている。それを国は、15年後には30%にしたいという計画を持っています。その辺りの啓発も含めまして、色々勉強していますが、教員になるための科目の方で、そういう科目を入れる部分の難しさなどありますでしょうか。

新崎：ありがとうございます。実は火曜日にうちの大学にも、児童養護施設の職員で里親専門員の先生に来ていただいて、授業をしていただきました。その時、生い立ち授業のお話もできました。

児童養護施設の場合は、子どもたちが小さい時からの成育歴があるので、子どもによっていつ教えるかというのは、とても大きな課題ではあるのです。必ず言っているのが、子どもの自己有用感をかえって傷つけることの対応策として必ずやっているのは、「とにかく生まれてきたときは、少なくともどんなお父さん、お母さんもあなたのことを愛していたよ」ということを伝えるようにしているそうです。それ以降、子どもの年齢によって言える、例えば虐待のケースの場合は、いきなり虐待を受けていたということは言えませんので、そういう部分については、少しオブラートに包みながら、家庭的な環境によって育て

にくいけど、生まれた時は、あなたのことを愛していたよということを伝えているということを聞いたところでした。

そして1/2成人式のことは私は知らなかったのですが、実は、母子自立生活支援施設という昔「母子寮」と言われていたその職員の方に来ていただいているのです。その方に訊きたいのですが、どうですか。

一般B（母子自立生活支援施設職員）：1/2成人式のことは、時々子どもの口から耳にはします。普通にお母さんのことだけを話をする子どももいれば、「少しお父さんのことは話しくかった」と素直に言ってくれる子どももいます。

新崎：では、そのことについて特別にケアをするということはないのですか。

一般B（母子自立生活支援施設職員）：施設の職員からは特にしていなくて、後でお母さんと相談をしたり、家の施設は保護者がいるので、そこでお母さんがどんな対応をしたかというのは後で話し合いをもったりします。

新崎：ありがとうございます。もう1点は、今ご質問いただいたように、今の教員養成課程の教科カリキュラムの中に課題を持っている子どもたちの問題を理解する時間というのが、少ないのではないかと感じています。私の専門が福祉教育、ボランティア学習なので、そういった分脈の中から、教員養成課程の中に、そういう時間を取り入れて欲しいという提案は、大学にもやっていて、今、チーム学校という取り組みをしていて、そういう形で、先生だけで子どもたちを教育するのではなくて、他の専門職の方と一緒に関わっていくことで、先生方の教育を十全に行うというご提案は、まさに私の課題であると思いながら聞かせていただきました。ありがとうございます。

一般A：（里親）専門員さんという方が、各都道府県の児童センターごとに置かれて、数は少ないですがいらっしゃいます。そういう方といつも一緒に活動しているのですが、その方が、制度ができて、そういう方ができてからとても目に見えて里親の理解、啓発、相談が進んだと思います。

新崎：里親委員の方もよく知っているので、お伝えしておきます。

一色：では、他の方、いらっしゃいますか。

相澤：すみません、今のお話でよろしいでしょうか。

私は甲南女子大学の小学校養課程で生活科の授業を担当しておりまして、まさに今おっしゃられたこ

とに非常に大きな問題意識を持っています。家族の多様性について教員が学校現場でどれぐらいの理解をしているのかが非常に大きなところになってくるかと思っています。私のできる範囲内では、生活科の授業で家族単元と呼んでいますが、家族を扱う部分はあります。1番大きな指導要領に示されている目標は、家族の中で自分が支えられて大きくなってきた実感が持てるようにということで、それを家族に感謝する、自分の役割を認めてもらって、家族の中で色々なことをやりながらやっていくということが示されていて、具体的にはお手伝いをしましょうとか自分の生い立ちを知りましょうなどが具体例として示されています。ただ、本当に素直にそれをやっていくと、当然多様な家庭の事情の子どもたちがいる。本当に里親、里子、養子縁組ということだけでなく、これからですと、同性愛とかステップファミリーなどいろいろな形の家庭が出てくる可能性があるわけです。そういう家族の多様性みたいな部分に子どもと関わる教師がどれだけ理解を示していくのか。本当に最大限の配慮をする必要があると、そのことによって傷つくことが当然出てくることを含めて授業では扱うようにしています。ただし、本当に現場の先生方もわかっていても、子どもの家庭の状況をつぶさにどれだけ丁寧に捕捉できるのかというのは、先生方の多忙な状況もありますので、なかなか難しいという矛盾の中で進んでいることであるということです。

もうひとつ、1/2成人式ですが、学校現場では今、感動体験が求められているような側面があります。ある種安易に、非常に親御さんの感動を呼び起こすことができる行事として、学校側のやりたいというニーズがあることも、その背景にあるのではないかと感じています。確かに大事な問題であると思います。

一般 A：例えば、子育て支援の中で今まで児童養護施設の職員さんと里親会の里親さんとは全然コミュニケーションがなかったし、里子で預けられたら、もう里親さんは自分の子どもを育てるだけで必死だったのですが、いろいろと話の中で里親さんは子育てのノウハウを持っておられて、最近になって国が里親サロンをやりだして、私たちも参加させてもらっているのですが、自動養護施設の職員さんと里親さんが施設の中で年に何度か会合を持つとかそういうコミュニケーションが進んできておりまして、その辺りのコミュニケーションで子育て論をお互いが学び合える状況というのがやっと最近できていたと感じています。その中でも先ほどの専門の方の力も大きいかなと思います。

一色：では、他の方でコメント、質問などございますか。

一般 D：大阪市北区の社会福祉協議会ソーシャルワーカーをしています。今、直面している問題なのですが、不登校の方の支援とかいろいろとご家庭で親御さんに精神疾患があって、子どもさんが不登校でという家庭の支援をさせていただいている中で、やはり専門職だけで対応しないで、できるだけ地域も巻き込みながら一緒に支援をさせていただきたいというようには思いつつも、地域との連携の中でなかなか個人情報などの壁などもありますし、また親御さんもいろいろな問題を抱えていらっしゃるの、すべて地域にということではないのですが、その辺りは調整しながら

地域とも一緒に支援をさせていただくというところで、なかなかまだうまく連携ができてくいのも現状としてあるのですが、その辺りで配慮する点やどういうところに気をつけたらいいというコメントがいただければうれしいのですが。

新崎:資料の5ページのところですが、公助、互助、自助のところですよ。今話をいただいたように、私もコミュニティソーシャルワーカーのスーパーバイズもさせていただいています。たぶん、一番難しいのは、公助の中での専門職連携は比較的できやすいと思うのです。今、子どもの関係でいうと、医療、保険、看護、介護、福祉、それから法律関係虐待のところという、司法とか警察、大阪市でしたら、通報があったら短時間ですぐに警察や消防署が駆けつけるという待機防止システムを大阪市はとっています。専門職の連携はわりと取りやすい。情報の共有と情報の分析、何が問題で何が必要かそして、役割分担、つまり、警察は何をする、お医者さんは何をする、ソーシャルワーカーは何をするという役割分担ができると連携できるのですが、地域協働、インフォーマルな部分との連携というのがとても難しい。そのとき、私は、地域とつながるときに一番の壁が個人情報の壁。私などはもちろんリスクもあるのですが、地域、特に近所の方、私は近くで助けるという言葉をよく使うのですが、近所の方というのは、専門職が把握している以上に個人情報を持っていると思うのです。だから、個人情報を開示するのではなくて、地域の方と日ごろからの信頼関係を作っていく、これはCSW、コミュニティソーシャルワーカーや地域社会福祉協議会の役割だと思うのですが、信頼関係を作ることによって逆に地域の近所の方、地域のボランティアの方とか住民の方から大切な個人情報をいただくというそういう視点、そしてそこから必要な分析をして、専門職がネットワークを組んでいくというそういう連携モデルを作っていくことが必要かと思います。

ですから個人情報の壁というのを先ほどのお節介さんもそうなのですが、だから逆にリスクもあります。そこからもしかすると個人情報が漏れて、トラブルの可能性もあるかもしれません。でも子どもに絞ると、多くの虐待の問題であったり、不適切な対応をしている状況の中でそういった形で、地域の方々との連携というのは、やはり専門職が持っていないといけないスキルの一つかと思っているところです。そのひとつがコーディネーション力とかファシリテーション力という問題を共有し、解決を一緒にやっていこうというそういう連携モデルをどう作っていくか。言うのは簡単ですが、難しいところです。

相澤:具体的にある種住民の方々をオーガナイズしていく際に、新しい町会組織に依存するのではなくて、新しいつながりみたいなものを作っていくほうがいいのか、それですと、屋上屋を架すような形になるのか、そのあたりの問題をどのように乗り越えるのか、という点について何か具体的な事例などはありますか。

新崎:子どものケースでお話します。私はインフォーマルなサポート、所謂ボランティアとか住民活動には2つのタイプがあると思うのです。そこに書いた共助というのは、NPOとか子ども支

援とか、例えば不登校の子どもの支援をする、先ほどの方のような里親支援など、テーマに基づいて関わる方ともう一つは近助、所謂特定の地域における住民活動で住民、福祉委員や民生委員などです。インフォーマルなサポートはこの2つの支え合いになるのですが、あまり、この2つは仲良くない場合が多いのです。つまり、何故かという、ボランティアの方にとったら近隣というのは、今まで仕事をしていて縦割りの中にいて、また地域に入ってから動くのは辛い、だから自分の好きなことはする。近助の方、福祉委員さんや民生委員さんに話を聞くと、ボランティアの人は自分の好きなことを好き勝手やっているだけだからあまり地域の中では当てにならないということであまり連携がとれていない。だから地域とかインフォーマル支援とか互助といっても、やはり関係性は厳しい。

今、吹田市で地域福祉活動をする時に、ワールドカフェという社会教育で色々な人が出会うというようなグループワークの方法を使って、共助と近助の協働を図っています。子どもに絞りますと、地域の福祉委員さん、PTAの方、民生委員さん、主任児童員さんに集まってもらって、同時に同じ吹田市の中の引きこもり支援のNPOの方とか教員を退職されて、自分たちで子どもたちに関わりたというNPOやボランティアグループを作っている方、PTAやそれから不登校支援の職員の方という違う考え方の人たちに、5、6人でグループになってもらって、自分たちの活動の情報共有をしてもらって、それを繰り返し、人を変えてやるというワールドカフェ方式で話会って地域にそんな活動がほしかったとか、福祉委員さんは担い手が不足しているけれども、そのような子どもたちの居場所づくりとか職作りみたいなところであれば、地域の公民館を使ってもらっていいとか、反対に引きこもりの支援の方にとったら、個人情報保護のように、私たちのところにくるのは、とても深刻になってからなので、近隣の方々がその中で、この頃学校に行けていない人がいるのだけれどもと早く教えてもらったら、専門職がやれるという形で情報の共有ができて、そこで緩やかなネットワークを作ったというケースがあります。そのやり方がうまくいったので、羽曳野市中でも今度は、ハピこれカフェという中でPTAの方と地域の方々とざっくばらんに話をしてもらってカフェをして、その中での課題をどのように専門職が関わっていくのかというやり方、これは具体的にやっています。

一色：鈴木先生、いかがでしょうか。

鈴木：甲南女子大学の鈴木と申します。

先ほど、相澤先生が地域での支えの部分とそれが屋上屋を架すことにならないかという話でしたが、今回の公助、自助、互助も含めて助け合いのネットワークは、基本的に一つのものというより重層性が大切だとか考えています。つまり、いくつもネットワークがあってそれが重層的になっている、それが重層的であるということだけではなくて、それが繋がっている。だから支えのコミュニティの点でいうと、今先生がおっしゃられたような、テーマ型コミュニティ、エリア型があって、それらが一体的になっている多元参加型コミュニティというのが今模索されていて、いわゆるテーマで活動されている支援と地元で根付いている支援、これをつなげていく。そこでネックになってきていると感じるのが、地域の方々

の問題意識というものが、どうしても偏りがちになる。

今回、特に先生のお話で興味深かったのは、6ページにありました教育コミュニティづくりとはというところで、家庭、学校、地域の共同なんだ、では、この地域の方々が学校や家庭の問題にどこまでコミットできるのか。もし、この地域の力というものがそちらに向くことができれば、潜在化してしまっている子どものしんどさ、それに気づくことができるのだろーと思っています。例えば、とある所で知的障害も持っている人がいた、知的障害を持っているので、ケースとしては成人ケースとして動いているのですが、どうもその支援歴をみると、子どもから大人になっていく過程であまり周りに気づかれていなかった。逆にいうならば、この子どもに対して、学校側はどんな対応をしていたのか。そして、地域の人たちはどう見ているのかというと、地域の人たちは見ていなかったということです。つまり、知的障害を持っているとか複雑な問題を持っている子どもや家庭というのは、それをオープンにせずに隠していきます。その隠すことで潜在化していく。その潜在化してしまっている問題をいくら専門職といえ、学校や専門家が気づくのは難しい。普段関わりがありませんから、気づけるわけがないのです。そうなった時に地域が必要になってくる。そこで先生がおっしゃられたワールドカフェが必要なのかと思うのです。

お聞きしたかったのが、そういう潜在化しつつある、特に10ページの貧困の連鎖の解消に向けた取り組みということで、子どもを中心に据えたまちづくりということで、本当に子どもの貧困で、その貧困連鎖への対応というものは、専門分野においても地域づくりの場面でもとても重要さを気づきながらも対応できない。もしくは重要さすら気づけていない地域もあったりする中で、このような取り組みを進めていける時のきっかけであったり、このようなまちづくりをしていこうと取り組みが始まったきっかけ、そこで動き出した時のコツなどがありますか。

新崎：きっかけは、たぶん活動されている方がそういう厳しい状況の子どもと出会ってしまったのです。それが放っておけないということで、方法としては、ここを全部割愛してしまったのですが、いろいろな活動の取り組みがあると思うのです。どういう方法があるかという、今、貧困の子どもたちに対しての学習支援というと、なかなか親御さんも逆にそのことをきちんとわかって、そして且つ学力をつけることが大切と思っている人しか来ないのです。よくサロンで、本当に来てほしい人が来ないというのと一緒なのです。ですからもう少し幅を広げて、子どもたちがほっとできる場所づくりとか、これは、子どもを中心に据えたまちづくりというこれは暮らしのまちづくりワーク北芝という箕面市でやっている実践なのですが、ここは、もちろん、いろいろな課題を抱えている子どもたちの支援なのですが、地域通貨というのを作って、所謂、すべての子どもたちが活動をしたり、そういう取り組みをしたら、通貨がもらえるということで、関わるのが簡単誰もが出入り自由、だから、あそこの食堂に行っている子どもは貧困の子どもとか、経済的に厳しい状況の子どもということではなくて自分たちもお手伝いしたり、地域通貨を社会に役に立つ活動をするところから、「まーぷ」という地域通貨をもらえるという仕組みです。これは、是非鈴木先生に学んでいただいて分析していただけたらと思います。私たちソーシャルワークはいいことだとやっているだけで、なかなか分析ができていないので、是非関わっていただけたらと

思います。私の大学の教え子が今関わってやっています。

ポイントは何か。箕面市の商業施設でその実践に共感をして、月に2回お手伝いとか宣伝係として、活動に参加するということで発行したりします。このような活動を一般化する中で、本当に困っている子どもたちには、そういう通貨を提供することで、誰が来てもそこで食事をしている。食べたい子どもは別に経済的に厳しくなくてもあるお金を払ったりしたら食べれるという、そういう一般化みたいなのところを少しやっていかないと、貧困の子どもたちのためにというとなかなか広がっていきにくいというのがジレンマでもあり難しいところでもあるかと思います。

鈴木：逆に相澤先生にもお伺いしたいのですが、総合子ども学科でもあまり小学校の方には詳しくないのですが、そういった経済的な貧困だけではなくて、社会的な貧困状況にある子どもに対して、学校の教員というのは、どこまで関わっていくことが現実的に可能なのだろうかという部分で、先ほど新崎先生のお話の中で『仁の物語』の中でも学校の先生がでてきましたが、物語のストーリー上、メインキャラクターではなくて、サポートとして出てきました。実際現場では、メインとして動かれている先生もいらっしゃると思うのですが、われわれは地域からの子どもへのサポートに意識がいきがちなのですが、学校側から子どもへのサポートの可能性を教えていただきたいのです。

相澤：私もそのあたりはあまり詳しくないのですが、そちらにいる上野さんは去年まで小学校現場にいらっしゃったので、直接知っていることがあれば教えてください。

上野：去年まで小学校で働いていました。今は、甲南女子大学の大学院で勉強をしています。私は、経済的に大変な家庭や児童擁護施設から通っている子どもがたくさんいる地域で4年生の担任をしていました。やはり半分ぐらいの子どもたちが課題や困難を持っている子どもたちで、大学では、教師の仕事は一番はやはり授業だと教えてもらって勉強してきましたが、私が一番初めにぶつかったのは、朝、クラスに子どもたちが集まらないということでした。子どもたちに連絡を取り、今どこに子どもがいるのかというのが課題でした。お昼ぐらいになって、段々と子どもたちが集まってきてという具合で、実際に皆で集まって授業ができるというのが、ほとんどないという感じでした。それは私のクラスだけではなくて、学校自体がそういう大変な子どもたちが頑張っている学校だったので、放課後の職員室での話題も授業の内容というよりは、子どもたち1人ひとりの問題を先生方と一緒に話しをしたり、放課後子どもたちの家庭を回るという先生方が多くいて、私自身も不登校の子どもたちの家に放課後行くことが毎日でした。

先ほど、言われたように、私自身この家庭の中に入っていいのかということをとっても悩んだこともありました。でも振り返ると、やらなかったらよかったなということよりも、やってよかったということがありました。1つ例をだすと、校外学習に2泊3日で自然学校に行ったのですが、その生徒はほとんど学校に来ていませんでした。母子家庭で、お母さんはずっと家にいるのですが、なかなか準備や子ど

もを送り出すことができなかったのです。その生徒にも校外学習に行ってほしいという私の願いもありましたし、生徒も行きたいという思いがあり、1週間前から校外学習の話をしに行ったり、一緒に準備をしたり、足りないものをお母さんと一緒に買いに行ったりして、当日の朝、家に行って起こして一緒に登校して無事に行けました。

今その子どもが5年生になって、学校に来られるようになったという話を聞いて、私だけの力ではないのですが、1年間だけでも関わって、少しでも変わったのであればよかったと思います。私もまた教員に戻るのですが、やはり教師は授業やクラスを子どもたちに勉強、勉強と思うところもあるのですが、私は1年間で1番学んだことを大切に、その子どもたち1人ひとりの家庭にも少しずつ入っていけばと思い、今大学院で学んでいます。あまり参考にはなかったとは思いますが、以上です。

新崎：ありがとうございます。上野さんが出会ったその生徒さんにとったら、かけがいのない体験です。今のお話でいうと、私は先生にこうすべきだというべき論でやると結構厳しいと思うのです。力量のある先生は、そういう形で取り組んでいただく。ただ、先生1人で頑張ってしまうと、結構しんどかったのではないのでしょうか。

それと学校全体がそういう取り組みを認める学校であれば、今やれることが出来たけれども、逆に学校の中でそういう問題を感じていらっしゃらない管理職の方がいらしたら、たぶん、子どものしんどさに寄り添いたいということと先生方が学校の方針と違うというジレンマの中で、とてもしんどい状況にあるのだろーと思います。そういう意味では、今、チーム学校という考え方が少しずつ提案されているところです。つまり、先生方がやるべき本来の業務としての学力を伸ばすそして、いろいろな社会生活習慣を作るということと同時にそれを応援するボランティアの方であったり、スクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラー、そういった専門職の方々と先生方が連携できるようなモデルをこれから創っていくということが模索される。

私はソーシャルワーカーだったので、学校が入りづらかった。学校の中で自己完結的にとどまっていたのはよくないと考えます。なかなか学校と福祉の垣根を越えられなかった時に、そういう学校の先生方にお話をきくと、そういうことが必要だと思っていたら先生がたくさんいらしたということなので、そういう形をこれからも提案し続けていきたいと思います。

今のお話をきくと、子どもさんが喜んでいる姿が浮かび、とてもうれしかったです。

一色：他の方でいかがでしょうか。

一般E：大阪の泉大津市の社会福祉協議会でコミュニティソーシャルワーカーをしています。今日は貴重なお話をありがとうございました。今、議論の中でもでてきたチーム学校ということで、今福祉と教育分野の連携が必要だということを日々の支援の中で感じています。チーム学校というのを今勉強しながら、いろいろな研修や講座にも入っているのですが、それを具体的にどういった形で現場の先生方と繋がっていけるのかと課題を感じています。社会福祉協議会にいま

すので、教育委員会との連携は徐々に関係性も出来てきていると思うのですが、なかなか現場の先生方と関わる機会、チーム学校の必要性について話す機会がなかったりして、模索しているところ です。何かその辺りのことでアドバイスをいただければと思っております。

新崎：アドバイスまでいきませんが、なぜ私がソーシャルワーカーなのに教育大学に行ったのかというのは、まさにそこなのです。つまり学校の壁というのを外から開きましよう と提案しても難しかったのです。それで、私にとっては敷居が高かった教育という現場の教育大学に入ることによって、そこで内部から信頼関係を作っていこうという形で今取り組ませてもらっています。具体的にいうと、今、なかなかうまくいっていないのですが、文部科学省はそういうスクールソーシャルワーカーとスクールカウンセラー、心理職を小学校中学校に配置していくという方向性は出しています。そういう意味で、学校を基盤とするソーシャルワークを専門職とするスクールソーシャルワーカーと地域を基盤とするソーシャルワーカーが連携を組めるような形が取り組まれつつあります。そういう仕組みづくりをこれからモデルで少しずつ作っていこうということでやっています。ただ、先ほどもいいましたように、学校文化というのが根強くてなかなかソーシャルワークとすぐに繋がるかというのは難しいので、これは本当にいい実践を積み重ねていくことで、成功体験を学校側にも持ってもらおうということがとても大事だと思っています。

一色：他にいらっしゃいますか。

一般 F：私は地域から子どもに関わっているということで、学校によく行っています。地域も今忙しくて、なかなか声をかけてもらえないということで、私も自治会長を4年やっていますが、その前に青少年健全育成ということで、地域で活動をしています。それは10年以上やっていますが、その中で、自治会と町の協議会などありますが、その橋渡しをどうしていくか、なかなか難しいです。こちらにも色々なしわ寄せがきて、実際に色々な活動をしなければならなくなっていきます。その中で今、学校のいろいろなところで、先生とも地域と連携しないといけないということで、気軽に職員室にもいって話をしたりしています。スクールソーシャルワーカーの方もおられて、地域の子どもたちが送って学校に行っていたのです。急いでいくのではなくて、ゆっくり行くのです。自分の地域の子どもでしたから、学校に連れていったのですが、その後先生に聞いたら、家庭の問題などあるということで状況を聞いたりして、地域でも子どもたちの状況を知って声掛けをしています。地域でも登校時に集合場所から一緒に歩いていたり、学校の前で挨拶運動をしたりして関わっています。そういう関わる中で、気楽に話が出来るとということで、それをしないと不審者と思われま すので、地域がどう関わっていくかが1番大事だと思っています。スクールソーシャルワーカーも始めは、教育事務所に配置されて、私の地域の小学校も一人入っています。周辺の学校も兼務という形で入っています。そういう点で、先生が連携して、その子どもの状況を指導していくということでやって折られます。不登校も今、小学校ではないです。中学校

でも一時暴力行為がありました、今はないという状況です。やはり地域と連携して学校がどうやっていくか、なかなか学校も意識が強いからです。

新崎: 今、大阪府の先生の平均の年齢なのですが、大阪府の教育委員会の20代の先生が6割です。とても若いです。若い先生だから子どもとの関係はいいのですが、保護者との関係やナナメの関係を作るには、保護者対応など、若い先生はなかなか厳しいことがあったりします。そういった時に地域で今お話されたように先生と気軽に話せる関係を作っていただいている地域があるというのはとても大きなことだと思います。

一般 F: 今、団塊の世代が退職していますので、私の地域の学校でも若い先生が増えています。それで今度の土曜に PTA 主催で3世代ふれあい祭りということで老人会の方が料理をしてくださいます。地域の人と学校のつながりということで、また子ども園にも老人会で行って色々な活動をしています。

一般 G: 社会福祉法人ルーテルホームから参りました。今日は仕事で法人としては、高齢の介護保険サービスが中心の法人なのですが、これからの法人の原点を見つめて高齢に関わらず地域のニーズに対応したいという方向性を持っているということで参加をさせていただきました。実は、不登校の子を持つ立場から一言発言させていただきます。私は子どもが4人いるのですが、一番上の中学1年生の子どもは3年生の途中から学校に行かなくなり、中学に入ってから行くようになったのですが、2年半ぐらい学校には行っていませんでした。今、2番目の子どもがまさに不登校になっています。今の上野さんのお話を聞いてすごいいいと思いました。今の担任の先生は、1度も学校に来たことがないです。先生を攻めているわけではなくて、今、新崎先生がおっしゃったように、若い先生で、妻が学校に行ったら、ぼくどうしたらいいですか、と言われたそうです。不登校の子どもを2人抱えて、感じたのは、不登校を問題と取るかどうかということをもう一度見つめていきたいというのと、では、何がしんどいのかというと、学校に行かないと次に行くところがない。選択出来ないしんどさです。特に私は福祉職なので、フリースクールに入れるほどの収入もないというところで、選択できない。そういうところで、色々な方々がおっしゃっていたような居場所であるとか、何らかの形で私の子どもが行ける場所というのがあると、また違うのかなと思ったという少し違う視点から発言させていただきました。

新崎: このような場所でそのようなお話をしていただくのは勇気がいると思います。ありがとうございます。今のお話でいうと、これは良し悪しは別にして、学校の先生方は不登校をすることが問題と捉えてしまいます。先ほど鈴木先生がお話されたように、家族の多様性というところで言うと、今教育の多様性というのも言われていて、学校に行けないけれども、何か原因があったら、例えば家の中で学習をする中で高校から行けるようになるとか、私の大学の卒業生の中にもやは

り不登校を経験した学生が大検に合格して大学に来れたということがあります。ですから、来れない事実が問題だと思って、先ほどの方は、きっとそれを子どもさんに攻めたりはしないと思いますが、それをマイナスに捉えずに、ではなぜ集団に入ることが難しいのか、その原因をご家族の方だけで考えるのではなくて専門職の人と考えながら、将来どのようなことができるかということを考えれる専門職の方であればいいと思いました。

一色：ありがとうございます。今日のテーマは「子どもの活動が地域社会を創る～学校と地域・家庭が協働していく点から学ぶ～」ということでした。ですから、今日いろいろな話、その中でも家庭とか教育とか地域とかで子どもの活動というところがもっと進んでいくために新崎先生はこのテーマを作ったと思うのです。そういう意味でいうと、それぞれいろいろな皆さん方が来てくださって、新崎先生、相澤先生がいろいろなお話をしてくださって、少しずつ子どもがほっとできるところとか、今までよりはよくなってきているのではないかと感じました。これが更に進むようにチーム学校であるとか地域の方でも何かチーム地域などができたらいいなと思ったりしました。

今日はどうもありがとうございました。